施設養護の実践における〈家族〉と〈子ども〉をめぐる概念
――社会的養護施設での質的調査から――

○野崎祐人（京都大学大学院）、三品拓人（日本学術振興会）、平安名萌恵（立命館大学大学院）

フィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生』を端緒として、近代的な〈家族〉や〈子ども〉の姿は歴史的・社会的な構築物であることが社会学領域における常識となった（Ariès 1960=1980）。近年では、アリエスの主張を継承しつつも再考するために、個別の歴史的・社会的文脈の中で〈家族〉や〈子ども〉がいかに立ち現れているのかを記述する作業が、史料調査に基づく社会史・歴史社会学的研究と、フィールドワークに基づく経験的研究の双方からなされている。その対象は、近代的な〈家族〉や〈子ども〉の形成の主要な場である家庭・学校にとどまらず、福祉や司法など様々な領域に及んでいる（元森 2009、松木 2013 など）。

こうした研究潮流のもとで、様々な事情から実親によって家庭の中で養育されない子どもを公的に養育する仕組みである社会的養護は、「教育規範や近代的家族規範などが複合的かつ多層的に折り重なるかたちで直接的に反映されやすい」（土屋・野々村編 2019:353）という観点から、〈家族〉や〈子ども〉の社会史・歴史社会学的研究の対象となってきた（土屋・野々村編 2019 など）。他方で、インタビュー調査や参与観察に基づいて現代の社会的養護における〈家族〉や〈子ども〉の立ち現れ方を経験的に記述する研究は、里親などの「家庭養護」に関しては蓄積があるものの（安藤 2017 など）、児童養護施設をはじめとする「施設養護」に関してはほとんどなされてこなかった。

そこで本報告では、共同研究者 3 人が社会的養護施設（児童養護施設、乳児院、母子生活支援施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設）での参与観察調査、職員へのインタビュー調査によって得た質的データをもとに、施設養護において養育者である職員がその実践の論理の中で、どのように〈家族〉や〈子ども〉をめぐる概念を参照しているのかの一端を示すことを試みる。このように多様な施設での多様な場面から得られた質的データを分析対象として用いるのは、第一に、こうした施設の種別の差異自体が相異なる〈家族〉や〈子ども〉に関する規範を反映しているからであり（例えば、児童養護施設と母子生活支援施設とでは、子どもの措置の際に参照される規範的な〈家族〉のありようが異なるだろう）、また第二に、〈家族〉や〈子ども〉に関する意味は多義的で文脈依存的なものであり（例えば、普段の養育の中での相互行為の場面と、調査者とのインタビュー調査の中で自身の実践の論理を語る場面とでは、施設職員の参照する〈家族〉や〈子ども〉に関する概念は異なるだろう）その複雑な様相を示すことが本報告の狙いであるからである。

報告においてはこうした様々なデータを比較しつつ、施設職員の実践の論理の中で〈家族〉はどのように参照され、それは文脈によってどのように異なるのか、また〈子ども〉はいかなる他の存在と対比されながら、いかなる存在として意味づけられているのかを述べていく。このように質的調査に基づいて施設養護の実践における〈家族〉や〈子ども〉をめぐる概念の様相を素描することによって、社会史・歴史社会学的研究の延長線上に現代（2010 年代後半以降）の施設養護に関する知見を付け加えるとともに、今後の施設養護を対象とした社会学的研究に対して一つの指針を提示することができるだろう。

文献（登場順）

Ariès, Philippe, 1960, L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Règime, Edition du Seuil,（杉山光信・杉山恵美子訳, 1980,『〈子供〉の誕生――アンシャン・レジーム期の子どもと家族生活』みすず書房.）
元森絵里子, 2009,『「子ども」語りの社会学――近現代日本における教育言説の歴史』勁草書房.
松木洋人, 2013,『子育て支援の社会学――社会化のジレンマと家族の変容』新泉社.
土屋敦・野々村淑子編, 2019,『孤児と救済のエポック――一六～二〇世紀にみる子ども・家族規範の多層性』勁草書房.
安藤藍, 2017,『里親であることの葛藤と対処――家族的文脈と福祉的文脈の交錯』ミネルヴァ書房.

キーワード：施設養護、〈家族〉、〈子ども〉